

大塩平八郎

寛政5年（1793）～天保7年（1837）

中斎と号す。

大阪東町奉行組与力。（石高200石）

私塾「洗心洞」で陽明学などを教える儒学者（陽明学）。

与力在職中、西町奉行与力弓削新左衛門の汚職事件を内部より告発。三千両を取り上げ貧民に施した。

他にも切支丹摘発、破壊僧の摘発を行った。これを大塩平八郎の三大偉績というが、東町奉行高山山城守の信任を受け行え得たことでもある。

天保の飢饉の際、その救済を高山奉行の後任跡部山城守（老中水野忠邦の実弟）に請うが入れられず、自分自身の蔵書(五万冊・六百数十両になったといわれる)を売り払い、困窮せる民を救う。

学者としては、呂新吾の『呻吟語』や『古本大学』、王陽明の『伝習録』を研究。洗心洞の講堂西側には王陽明に倣って「立志」・「勸学」・「改過」・「積善」の四編を掲げ、東側には呂新吾の格言十八条を掲げていた。門人には大学、中庸、論語と孟子を講義。他の五経や「孝経」、周官・儀礼の「三礼義疏」などなど。

陽明学者としては、中江藤樹・熊沢蕃山・三輪執斎に次ぐ第一級の人物と言われる。

頼山陽をして“小陽明”と言わしめ、山陽は彼の胆と識を多とした。

「君観吾心 吾佩君心 百歳不蠹又不折」と。

与力隠居後の天保8年大阪において救民・幕府批判の兵を挙げ（大塩平八郎の乱）、敗れて潜伏、後に放火して自殺。

騒乱そのものは、隠居の与力と少数の彼の門人や同志による些細なものであったが、社会に与えた影響は多大であった。

著書に『洗心洞筭記』、『古本大学刮目』等七部。